



Profile

2017年3月 東京大学理学部生物化学科 卒業
2017年4月 東京大学大学院理学系研究科生物科学
専攻修士課程 入学
2018年4月 東京大学国際卓越大学院ライフサイエ
ンスコース1期生
現在に至る

体内時計研究の最前線に触れる

時差ぼけを最小限に抑えるためには、い
ますぐに寝るべきか否か。そんな議論をし
ながら、夕方でもまだまだ日が高いフロリ
ダへと降り立った。私は、生物科学専攻の
深田研究室にて、ほ乳類の体内時計メカニ
ズムを研究している。ラッキーなことに、
1年おきに米国にて開催される時間生物学
会 (Society for Research of Biological Rhythms
meeting) でポスター発表を行うチャンスを
いただいたので、2018年5月11日(金)
から1週間、初めての国際学会に胸を躍ら
せながら渡米した。

体内時計は、遺伝子からタンパク質をつ
くる量を日内変動させることによって睡眠
や代謝のリズムをつくり出しており、海外
に行ってもしばらくは日本時間に合わせた
リズムでタンパク質が作られてしまうこと
から時差ぼけがおきる。体内時計の仕組み
は、バクテリアからヒトにいたるまで地球
上のほぼすべての生物が保持しており、学
会には、さまざまな生物種を扱う研究者が
集まっていた。折しも昨年、ショウジョウ
バエにおける体内時計メカニズムの発見に

対してノーベル医学・
生理学賞が授与されて
おり、学会はお祝いムードにあふれていた。3人
の受賞者のうち、M.ロス
バッシュ (Michael Rosbash)
博士と M.ヤング (Michael
Young) 博士の2人も学会
に参加しており、3日目の
夜にはノーベル賞記念講演
が行われた。時計遺伝子発
見の経緯や、ノーベル賞授
賞式の裏話など、たくさ
んの写真とジョークを交えなが
ら2人が講演を行い、最後は
スタンディングオベーション

によって盛大な賛辞がおくられた。体内時
計の仕組みが少しずつ紐解かれ、たくさ
んの人の手を経て今があると思うと、研究と
いう営みの大きさに圧倒される気がした。

また、今回の学会では、学生やポストク
などの若手研究者も積極的に参加できるよ
うな工夫がされており、たとえば、シン



2017年度ノーベル賞受賞者 M.ヤング博士と。(右：著者)

ポジウムの合間に「Meet the professor room」
という部屋に行くと、著名な研究者に会
ってアドバイスをもらうことができる。毎
日この部屋に通ったところ、ノーベル賞
受賞者の M.ヤング博士をはじめとする多
くの教授と会って話すことができた。ヤ
ング博士はとても気さくな方で、最近の
研究成果に関する質問にも丁寧な答えを
くれたほか、写真撮影にも快く応じてく
れた。

さらに、若手向けのワークショップも充
実しており、さまざまな国の学生と交流
することができた。研究内容にとどまら
ず、各国の文化の話から最近はやりのビ
ジネスに対する賛否など、多岐にわたる
トピックが話題にのぼり、視点を広くも
つことと意見を明確に主張することの大
切さを実感できるよい経験となった。

最後にこの場をお借りし、学会への参
加にさいして皆さんのアドバイスをくだ
さった深田研究室の皆様と、渡航を支
援くださった加藤記念バイオサイエンス
振興財団に厚く御礼申し上げます。



会場近くのホテルの部屋から撮影。お昼休みには友人たちとビーチを散歩した。